

言語活動の充実に関する指導事例 小学校 国語科(第3学年)

【学習活動の概要】

<b>1 単元名</b> 心の通い合いを読もう
<b>2 教材名</b> おにたのぼうし
<b>3 目標</b> 場面の移り変わりとらえ、叙述を基に登場人物の気持ちの変化や情景について想像しながら読む。
<b>4 学習指導要領とのかかわり</b> C 読むこと (ウ) 場面の移り変わりに注意しながら、登場人物の性格や気持ちの変化、情景などについて、叙述を基に想像して読むこと。 (カ) 目的に応じて、いろいろな本や文章を読むこと。
<b>5 言語活動 (9分類の視点 / 言語活動例の視点)</b> A 物語や詩を読み、感想を述べ合うこと。(ケ ア) B 必要な情報を得るために、読んだ内容に関連した他の本や文章などを読むこと。(ケ オ) (注) 9分類の視点：国語科における三領域を関連させた言語活動、ケは「読むこと」と「読むこと」 言語活動例の視点：学習指導要領解説国語編、中学年C「読むこと」で示された言語活動例項目との関連
<b>6 指導計画 (全 10 時間)</b> ①単元の内容から学習の見通しをもつ ○ 単元名から学習の見通しをもち、題名から作品の内容を想像する。 ○ 作者の他の作品を紹介し、学習への興味・関心をもつ。 ②おにに関する資料を集める ○ おにが登場する本や話から、おにの立場やその描かれ方についてまとめる。(言語活動 A) ○ まとめたものを交流し合い、おにについて理解を深める。 ③学習のねらいと計画を知り、めあてをもつ ○ 全文を通読しながら場面分けをし、初発の感想を書く。 ○ 感想を交流し合い、読みのめあてを考える。 ○ 漢字の読みや難意語句について確認をする。 ④文章の内容を読み取る ○ 場面ごとに登場人物の心情や様子、それらの変化について読み取る。 ○ 場面の中から気に入った言葉や表現を選び、短文を作成する。 ⑤読みの確認をし、学習をまとめる ○ 学習後の感想をまとめた後、初発の感想と比べさせ、読み取りの変化を実感する。(言語活動 A) ○ おにが登場する本や話から、おにについて調べたことを新聞にまとめる。(言語活動 B)

## 【解説】

### 【関連する資料を集める】（指導計画②） **－9分類「ケ」の言語活動を取り入れた実践例－**

一般的に「おに」は悪の象徴として登場することが多い。しかし、この作品に登場する「おに」は、優しい心をもっている。第一場面の「人間っておかしいな。おには悪いって決めているんだから。…」の部分や、第五場面の読み取りを深まりのあるものにさせるために、日本の「おに」が他でどのように扱われていたり描かれていたりするのかを知ることは作品を読み取る上で有効な手段であると考えられる。

情報の収集は、基本的には図書から探し出すことを前提とする。

調べたことをまとめる場面では、後半に新聞でまとめるために必要なスキルである割り付け方や見出しの付け方、挿絵の方法、引用のルールについておさえておく必要がある。

子どもたちは、幼い頃から日本の昔話等で「おに」の存在を知っているため、「おに」が登場する話を見付け出すことも容易であろう。また、教材を扱う時期はちょうど節分の行事とも一致する。家庭学習などで言い伝えやメディアの記事に目を向けさせてもよい。身近なところから情報を収集し、読み取りに生かすことは教材の魅力を高め、学習意欲を高めるものと考えられる。（言語活動例 B）

### 【関連する資料を集める】（指導計画⑤） **－9分類「ケ」の言語活動を取り入れた実践例－**

作品を一通り読み終えた後の子どもたちの心の中には、日本に古くから伝わる「おに」の話や人間と「おに」との関係などについてさらなる興味や関心、疑問などが芽生えることが予想される。そこで発展的な読書活動を学習の最後に取り入れることで、読書の範囲をさらに広げさせることが期待できる。新聞を作る場面では、指導計画②の学びを生かし、児童一人一人の思いが表れるようにしていきたい。

### 【言葉や表現に目を向けさせる】（指導計画④）

場面ごとに、自分の気になる言葉や表現を一つ選び、その言葉や表現を使って短文づくりに取り組ませる。子どもたちは言葉集めが好きである。新しい表現を手に入れ実際に使う学習を繰り返し行うことで、日常の気になる表現にも目が向くようになり語彙の獲得につながることを期待できる。さらに、物語教材のよさである言葉と表現を活用する。作者は、人物の心情や情景を読み手によりよく伝えようとするために、その場に最適の言葉を選び記述していく。このように選び抜かれた言葉の中から好きな表現に目を向けさせ、生活のツールとして使えるようにしていくことは生きる力を高めることになる。

### 【読み取りが深まったことを実感する】（指導計画⑤）

作品を読み終えた後で、子ども自身が、これまでの自分の読みとどのように変わったのかを実感するとともに、感想を交流し合い、友だちと自分とどこが違うかを比較して考えることが大切である。初発の感想と読み終えた後の感想がどう違うか、どの時点で自分の読みが変わったのかを知ることが読みの力を実感することにつながる。（言語活動 A）